



このころ浜岡1号の事故報道に、落ち書きが見られるようになった。海山町に住居投票が済んだからかも知れない。配管破断の原因推定が、ウォーターハンマー、熱疲労、爆発と目まぐるしく変わり、書き立てるマスコミ自体が訳が分からなくなってきたかも知れない。怪しげな評論家の学説の紹介が、所詮恥をかいただけと知ったからかも知れない。

いずれにせよ、事故原因は調査中だった。十四日、安全保安院は、原因は融媒反応が進んで水素が自然発火、溜まった水素が爆発したと断定したという。今後再現実験等が行われるが、まだ調べなくてはならぬところは沢山ある。軽々に推論憶測を発表し世間を惑わしてはならない。ママ情報が緊急時の混乱被害を増幅させる元凶なのだ。

このころこの事実第一報に何か消化不良を起す原因が多かった。これは共通していたから、発故、危険性を判断する目安は度々かかっていた。七段階の中で最も軽微なものだ。火事の場合、せいぜいボヤ程度の

事故当初の質問は混乱していた。特に、基本的には記者の勉強不足だ。続いて現れた制御棒スタアチューブ溶断とこのこと。他意はないだろうが、事情が分からぬと人は色眼鏡で見ると。注意すべき点である。

浜岡騒動の教訓



石川 迪夫
いしかわ・みちお
一原子力発電技術機構特別顧問。56年東大機械工学を卒業し、日本原子力研究所東海研究所副所長などを経て91年、北大工学部教授。原子力専門。兵庫県出身、67歳。

接部の亀裂漏洩、これが問題をしれさせた。事実だから避けようはないが、大公開の席上、權威ある先生方があれこれと破断原因の推論を述べられた。取材が重なる質問も打ち解けてく確とした客観的証拠のないままだ。正義感の重荷がこんな弊害を生むのだ。因

来、現地調査を行ったことが記者の鼻をの説を信じれば良いのか迷うのである。だが他社には負けられない。だからワーッと派手に出た。

僕の知る限り、以上の五点が今回の国家は一体どうなっているのか。ある先達の吐き捨てたような言葉である。

「ボヤが起きた。消した人が場所がわからなかった。警察が来て取り調べの最中に、裁判所まで出て来てあげたわ言う。法治国家は一体どうなっているのか。ある先達の吐き捨てたような言葉である。」